

山本壽の唱歌劇に関する研究

升 田 真依子

(本講座大学院博士課程前期在学)

School-Song Dramas of Hisashi Yamamoto

Maiko MASUDA

Abstract

Musicals are popular in Japanese schools today, but many people believe that most musicals are simply held for exhibition purposes. I aimed to investigate the purpose and origins of musicals in Japanese schools. I was interested in school-song dramas, and this study aimed to examine Hisashi Yamamoto's views on the subject. School-song dramas were originally developed by Yamamoto and Kuniyoshi Azisaka in the Taisho period and were performed at the school arts festival of elementary school attached to a Hiroshima teachers college. Yamamoto came up with the name "school-song drama" and he composed many songs for it. This dramatic form developed under Yamamoto's guidance. Through examining Yamamoto's descriptions about school-song drama, it became evident that its purpose was to cultivate children's minds. Yamamoto emphasized an appreciation of school-song dramas rather than actually taking part in them. He performed school-song dramas as a way of cultivating aesthetic sensitivity: he did not expect children to improve their musical skills in the process. School-song dramas reflect both Yamamoto's views about education and trends in education and society in his day.

1. はじめに

今日の学校現場では、音楽劇による教育が盛んに行われている。音楽劇は目的や意義によってその性格や形態が大きく異なるが、日本では、見せることを目的とした音楽劇の実践が多いことが指摘されている(北村 2001)。日本での音楽劇は、歴史的に見て、常にそのような傾向を持ち続けていたのであろうか。そこで本研究では、学校教育における音楽劇の源流でもある、広島高等師範学校附属小学校で行われていた唱歌劇に注目した。唱歌劇の立役者は、広島高等師範学校附属小学校訓導の山本壽と理事の鯨坂國芳(小原國芳)である。本研究では、唱歌劇を主導し、作曲を行った山本壽に焦点を当て、広島高等師範学校附属小学校の教育雑誌『学校教育』の記述を中心に、唱歌劇の目的や意義を明らかにする。

吉富(1994, 1995)は、『学校教育』に掲載された山本の論述を、唱歌劇創始以前と唱歌劇作曲時期に分けて検討し、唱歌劇は山本の音楽教育観に影響を与えていないことを明らかにした。しかし、山本の音楽教育観が唱歌劇に与えた影響については検討されておらず、研究の余地があると考えた。そこで本稿では、『学校教育』での山本壽の論述が唱歌劇にどのように反映されているかを検討し、山本壽の唱歌劇観を明らかにすることを目的とする。

2. 唱歌劇について

1) 創始の経緯

唱歌劇は、大正8年に広島高等師範学校附属小学校の学芸会で行われたのが始まりである。『学校教育』第6巻第69号では、主事の佐藤熊次郎が学芸会について論じている。学芸会は、普段の学習によって習

得した知能の発表会と解されており、子どもの学業奨励や保護者に対する教育の参考を目的としていた。それに対し佐藤は、学芸会を一種の学校祭としたいと考えており、学芸会の趣旨について、子どもたちが楽しんで取り組むなかで芸術に対する趣味を涵養する場であると主張している。子どもは歌ったり踊ったり製作したりと芸術的要求が強く、教師はそれらを伸ばすことが役目であるとしている。子どもの自然に現れる歌謡や遊戯を人為的に美化すること、また各教科の知識や技能を結合し劇化し遊戯化することで、子どもを俗悪醜穢な見世物や俗劇から純で高尚な芸術へと導くことはできないかと考えていた。このように佐藤は芸術教育に対する深い理解を示していたことに加え、大正8年は憲法発布三十年という記念の年ということもあり、例年より芸術色を強めた学芸会を行いたいと考えていた。佐藤は学芸係に、山本壽、鯉坂國芳らを任命し、この年の学芸会で唱歌劇「天岩戸」と「桃太郎の凱旋」が上演された。

『学校教育』第6巻第69号には、唱歌劇に関する山本壽の論述も見られる。この中で山本は、唱歌劇は自分からやり始めた試みであると明言し、唱歌劇と名付けた理由や創始の経緯について詳細に述べている。山本は、授業で児童に唱歌を教授する際に、児童が劇的動作を伴うことが多いことに気付き、加えて各教科と唱歌科との関連のなさ、学芸会での各演目の関係の薄さという課題意識から、すべてを統合した「唱歌劇」によって真に円満な情感を育てようと考えた。

山本は唱歌劇の名付け親であり、唱歌劇の中心的役割を担っているが、その創始の背景には主事である佐藤の芸術教育観や学芸会に対する意向が絡んでいた。

2) 名前の由来

山本は、『学校教育』第6巻第69号「唱歌劇について」の中で、唱歌劇と名付けた理由について論じている。唱歌劇と名付けたのは山本であるが、山本自身「唱歌劇」と呼ぶことに感心していなかった。なぜなら、「唱歌劇」の「唱」を除くと「歌劇」となり、多くの人が「歌劇」と聞くと、オペラではなく浅草などで行われる低級な「ドンチャン騒ぎ」を連想してしまっていたからである。しかし、「劇」を除くと「唱歌」となり、唱歌は当時非常に純正なものとして認識されていた。山本が「唱歌劇」と名付けたのも、その上品なイメージを大切にするためであり、「唱歌劇」は「純美、雅正にして新鮮、可憐、無邪気なるものより高尚優美なるもののみを選びて演ぜしめ、又鑑賞せしむるものである」（山本 1919, p.51）と考えたからである。

3) 唱歌劇の展開

唱歌劇は新しい試みであり、賛否両論があったが、山本壽を中心に広島高等師範学校附属小学校の学芸会において大きく発展していった。全国各地には唱歌劇を実践したいという教師も多く、大正9年から11年にかけて『唱歌劇』第一集から第五集が出版された。広島高等師範学校附属小学校で行われた唱歌劇の演目を示したのが表1である。

唱歌劇は、第19回学芸会以降姿を消し、『学校教育』においても山本の唱歌劇に関する論述は見られなくなる。というのも、大正13年に岡田良平文部大臣が、化粧や仮装をして演劇興行のようなものをするのはいけない、当時の官立学校長に向けて「学校劇禁止令」を出したからである。しかし、直接文部省の指導下になかった私立の学校では、引き続き劇を伴った教育が行われていた。中でも、唱歌劇を山本と共に創始した小原國芳が赴任した成城小学校では、その後も学校劇という形で行われていた（冨田 1993）。

表1 広島高等師範学校附属小学校で行われた唱歌劇

第14回学芸会（大正8年）	天岩戸
	桃太郎の凱旋
	狐と虎（唱歌対話）
全国小学教育研究大会（大正8年11月）	舌切雀
第15回学芸会（大正9年5月）	花咲翁
	こうもり（唱歌対話）
第16回学芸会（大正10年2月）	きのこのまどろ
	大蛇退治
第17回学芸会（大正11年2月）	蟻と蟋蟀
	一寸法師
第18回学芸会（大正11年11月）	かちかちやま
	羽衣
第19回学芸会（大正12年11月）	螢の国
	瘤とり
	山の幸彦

3. 唱歌劇の分析

『学校教育』に記載された学芸会概況と、山本壽が出版した『唱歌劇』第一集から第五集を用いて唱歌劇を分析していく。

1) 題材について

広島高等師範学校附属小学校で行われた唱歌劇の題材を、神話、日本お伽噺、イソップ物語、読本、オリジナルの5項目に分類した。

表2 唱歌劇の題材分類表

	演目	学年	神話	日本お伽噺	イソップ物語	読本	オリジナル
第14回学芸会	天岩戸	高等科	○				
	桃太郎の凱旋	6年, 高等科		○			
	狐と虎（唱歌対話）	1年				○	
全国小学教育研究大会	舌切雀	不明		○			
第15回学芸会	花咲翁	5, 6年 高等科		○			
	こうもり（唱歌対話）	3年（男）			○	○	
第16回学芸会	きのこのまどろ	2, 3年					○
	大蛇退治	各学年	○				
第17回学芸会	蟻と蟋蟀	1, 2年			○		
	一寸法師	5, 6年 高等科		○			
第18回学芸会	かちかちやま	2年		○			
	羽衣	5, 6年 高等科	○				
第19回学芸会	螢の国	1, 2年					○
	瘤とり	3, 4年		○			
	山の幸彦	5, 6年	○				

表2からわかるように、最も多い題材は日本お伽噺であり、全ての学年で行われている。次に多いのは神話である。日本お伽噺やイソップ物語、読本というように、唱歌劇の題材は教訓じみたものが多い。このことから、唱歌劇を演じ鑑賞することで人格育成につなげようとしていたことが伺える。また国語や歴史といった他教科との連携を意識していたことも読み取れる。

学年ごとにみていくと、神話は高学年に多く、イソップ物語は低学年に多い。低学年が演じる唱歌劇には人間は登場せず、動物や生物が中心である。最も多い日本お伽噺は学年を問わず行われている。低学年は可愛らしい題材、高学年は少し高度な題材というように、学年に合わせて工夫して選択していたことが読み取れる。

2) 唱歌の役割

山本壽が唱歌劇の唱歌を担当していた。最初に行われた「天岩戸」では、既成の曲に歌詞をつけかえただけで、山本が作曲した唱歌はみられなかった。また、唱歌は合唱隊のみが歌い、配役ごとの唱歌はみられず、唱歌がなくても劇が成り立っていた。この段階では、台詞によって劇が進行しており、唱歌は劇の内容の補足でしかなかった。

しかし、それ以降の唱歌劇では、台詞を歌に置き換えることで、唱歌によって劇の展開が明らかになるものが増えた。また、同じ旋律を用いて劇に統一感を出したり、既成の唱歌を劇の軸にしてオリジナルの唱歌を付け加えたりするなど、工夫がみられるようになった。唱歌自体も、単旋律だけでなく三声に分かれるものも出てきて、多様性が増してきた。

3) 唱歌の調性

唱歌劇に出てくる唱歌について、演目ごとに調性をまとめたものが表3である。

表3 唱歌劇における唱歌の調性

	学年	ハ長調	ト長調	ニ長調	イ長調	ホ長調	ヘ長調	ハ短調	ト短調	二短調	ホ短調	ヘ短調	不明
天岩戸	高等科	1				1	1	1					
狐と虎	1年						3						
舌切雀	不明		1	3					3	1	2		
花咲爺	5, 6年 高等科		5	2					3				
こうもり	3年(男)		3							1			
大蛇退治	各学年			1			3	1	1			1	
一寸法師	5, 6年 高等科		4	5	1						1		1

山本は、短調の唱歌も多く作曲し、調号に関しても最大4つまで出てくる。小学生の児童にとってはやや難しく感じられるが、低学年では調号も少なく、調性も統一されており、発達段階における配慮がみられる。

4. 山本壽の音楽教育観

山本は、広島高等師範学校附属小学校の教育雑誌『学校教育』の中で、音楽に関して多数論じている。表4に、唱歌劇創始以前、唱歌劇の実施期、唱歌劇衰退後の3つの時代にわけて、山本の論述のタイトルを掲載した。太字のものは唱歌劇に関する論述である。

唱歌劇創始以前である大正7年以前の山本の論述は、唱歌教授の問題点から派生した、指導法や教材に関するものが主で、「唱歌教授の目的は人格陶冶である」という信念が貫かれていた。山本は、児童の心身の発達に適した楽しい授業を追い求めているが、単に授業で授けた歌だけ歌えたのでは、将来自分で歌えるようにはならないため、児童の音楽的技術の向上も重視している。人格陶冶のためには質の高い音楽が必要である、というのが山本の考えである。

唱歌劇実施期である大正8年から13年までは、唱歌劇実施前と比べて新たに鑑賞教育についての記述がみられた。この頃から日本の音楽教育にも鑑賞を取り入れるべきだという考えが広がり、唱歌劇と時を同じくして山本の関心は鑑賞教育にも向けられていた。

大正13年8月以降は唱歌劇に関する論述は一切見られず、唱歌劇衰退後は鑑賞教育に力を入れていった。

表4 『学校教育』における山本壽の論述

唱歌劇創始以前	第1巻 (大正3年)	第7号	唱歌教授の根本的欠陥 pp.8-12	
	第2巻 (大正4年)	第11号	人格陶冶と唱歌教授 pp.232-236	
		第13号	青島陥落 p.120	
	第3巻 (大正5年)	第17号	幼学年児童に対する唱歌教授の取扱及び注意 pp.48-55	
		第24号	唱歌の衛生及び生理的要件 pp.106-116	
	第4巻 (大正6年)	第28号	略譜改造論 pp.51-55	
		第39号	児童唱歌について pp.58-64	
	第5巻 (大正7年)	第41号	複音唱歌と単音唱歌 pp.45-49	
		第43号	欧州に於ける歌謡と唱歌教授の歴史的発達 pp.42-52	
		第47号	唱歌教材の選択及生理 (一) pp.33-40	
		第48号	唱歌教材の選択及生理 (二) pp.38-42	
		第50号	唱歌教材の選択及生理 (三) pp.39-45	
		第54号	聴唱法より視唱法まで pp.86-97	
		第60号	唱歌教授に関する参考書 (一) pp.58-67	
	第6巻 (大正8年)	第61号	唱歌教授に関する参考書 (二) pp.53-59	
		第65号	応募当選歌詞曲譜 p.82	
	唱歌劇の実施期	第6巻 (大正8年)	第69号	唱歌劇について pp.50-54
		第7巻 (大正9年)	第74号	儀式唱歌について pp.46-55
第77号			1月1日の儀式唱歌について pp.37-42	
第8巻 (大正10年)		第79号	紀元節の儀式唱歌について pp.29-34	
		第85号	師範学校音楽科の改造 pp.8-14	
第9巻 (大正11年)		第87号	学校唱歌の民衆化 pp.55-65	
		第91号	唱歌教授上の諸問題 (一) pp.27-34	
		第92号	唱歌教授上の諸問題 (完) pp.32-38	
		第97号	師範教育第二部に於ける音楽科制度の欠陥 pp.28-31	
		第101号	学校唱歌改良意見 pp.100-106	
		第103号	時勢に逆行する音楽教育 pp.111-115	
		第106号	校歌の制定に就いて pp.39-44	
第10巻 (大正12年)		第107号	校歌の制定に就いて (承前) pp.11-24	
		第110号	子供の唱歌に就いて pp.81-87	
第11巻 (大正13年)		第113号	唱歌教授五十年 pp.39-47	
		第116号	唱歌教授五十年 pp.9-14	
		第119号	辻音楽に就いて pp.7-13	
		第122号	オーケストラの組織 pp.135-142	
	第127号	唱歌劇に就いて pp.9-15		
第12巻 (大正14年)	第131号	英米仏国々歌の由来 pp.130-137		
	第134号	再び唱歌劇に就いて pp.61-73		
唱歌劇衰退後	第11巻 (大正13年)	第137号	亜米利加の国歌の由来 pp.131-139	
	第12巻 (大正14年)	第140号	時代の風潮と流行唄 pp.53-58	
		第144号	音楽の鑑賞教育と教材選択の一方法 pp.22-27	
	第13巻 (大正15年)	第147号	音楽の鑑賞教授に於ける一般的注意 pp.18-22	
		第149号	幼学年児童に対する音楽の鑑賞教育 pp.22-30	
	第13巻 (大正15年)	第150号	幼学年児童に対する音楽の鑑賞教育 pp.18-23	
		第151号	高学年児童に対する音楽の鑑賞教育 pp.40-47	
		第155号	高学年児童に対する音楽の鑑賞教育 pp.43-55	
		第157号	高学年児童に対する音楽の鑑賞教育 pp.25-29	
		第160号	高学年児童に対する音楽の鑑賞教育 (承前) pp.88-96	

5. 山本壽の唱歌劇観

1) 唱歌劇の意義

唱歌劇に関しては多くの批判が寄せられており、そのような批判に対して山本は、『学校教育』の中で唱歌劇の必要性や効果について主張してきた。唱歌劇に関する4本の論述¹⁾をもとに、山本の考える唱歌劇の意義を5つの観点にまとめた。

①唱歌科と各教科との融合

明治の終わり頃から、教育界では他教科との連携が叫ばれていた。唱歌科に関しては、国語や地理、歴史、図画のような教科と関連があると山本は考えており、それらを融合することで真に円満な情感を育て

ようと唱歌劇を試みた。

②児童に本来備わっている劇的性質を効果的に生かす

大正期に入ると、「ドイツ労作教育思潮」と「芸術教育思潮」によって、児童の身体的活動が重視されるようになった。山本自身、普段の唱歌教授の際に児童の劇的動作が見られたことから、本来備わっている劇的性質を善導することで教育的効果を上げようと考えた。

③俗悪な劇や見世物から遠ざけ、本物の芸術を教える

唱歌劇が行われていた大正期は、俗悪な劇も多く、劇はすべて低級なものという認識が強かった。山本の唱歌劇に関する論述の中にも、そのような誤解を解くためのものが多くみられた。山本は、低俗な劇を子どもに見せないためにも、唱歌劇を通して純粋な劇を享受し、真の芸術を教えようとしている。しかし山本は、唱歌劇に大人が求めるような高尚さは求めていない。唱歌劇は、あくまでも児童が学芸会で行う劇であり、児童の発達段階に即した芸術性を求めている。実際に唱歌劇は、演じる学年に合わせて作られていた。

④成績発表の場であった学芸会改革

これまでの学芸会は、学習の成果を示す成績発表という性格が強かった。そのことに疑問を感じた山本は、児童が見ることに重きを置いた唱歌劇によって、学芸会を改良しようとした。また、これまでの学芸会では、朗読や対話、唱歌などが別々に発表されるだけであった。教科融合と同様に、学芸会の演目においても融合することで、教育的効果を上げようと唱歌劇を試みた。

⑤鑑賞させることで真に円満な情感を育てる

鑑賞させることは、唱歌劇において山本が最も重視していたことである。唱歌劇に対する批判の中に、唱歌劇は唱歌の得意な児童のための教育となり、苦手な児童には教育の機会均等がなされていないという意見があった。山本は、絵画や音楽は機会均等というよりも、得意なものが行い、苦手なものは鑑賞する側に回った方が満足を感じ教育的効果も大きいと考えている。唱歌劇に関しても、演じることだけでなく鑑賞することに意味があり、全員が必ずしも歌い演じる必要はないとしている。鑑賞することで感動し、心情を陶冶することが大切だと考えている。

2) 唱歌劇の目的

山本は、「唱歌劇を試みたのは日常の唱歌教授上よりも、寧ろ従来の学芸会の改良にあった」（山本 1921, p.37）としている。山本は、唱歌劇を普段の授業とは切り離し、学芸会で行うためのものと考えていた。そのため、唱歌劇を行うことによる歌唱能力の向上は意図していなかった。

唱歌劇を行うに当たり、役者を養成するのかという批判や、歌に加えて台詞と動作もあるので児童には困難だという批判があった。それに対し山本は、「唱歌劇は唯々演じさせるばかりが目的では無くて、それと同時に鑑賞させるのが目的」（山本 1924, p.73）であると主張し、多くの論述の中で鑑賞させることが大切だと繰り返し述べている。山本は、従来の学芸会が成績発表の場であることに疑問を感じ、それを改善すべく唱歌劇を始めたのであり、見せることよりも見ることを大切にしている。唱歌劇は、学芸会において一部の児童が行っており、全校児童が行っていたわけではない。山本も、唱歌劇は唱歌が苦手な児童に無理に行わせる必要はないと考えている。唱歌劇を鑑賞し、児童が喜び、楽しみ、感動するなかで、芸術に対する感性を養い、真に円満な情感を養う。このことを山本は第一に考えていた。つまり、唱歌劇の目的は、鑑賞させることで児童の心情を陶冶することである。

3) 山本壽の音楽教育観と唱歌劇観

山本の音楽教育観には、「唱歌教授の目的は人格陶冶である」という信念があり、普段の授業においても人格陶冶のために楽しい授業をしたいと考えていた。学芸会で行われていた唱歌劇の目的も、鑑賞させることで児童の心情を陶冶することであり、山本の信念と通じている。さらに山本は、人格陶冶のために

は質の高い発達段階に適した音楽が必要であると考えていた。唱歌劇においても、余興劇や田舎芝居の真似ごとではなく、児童の発達段階に合わせた芸術的で高尚なものでなければならぬと主張していた。これらのことから、唱歌劇は山本の音楽教育観が大きく反映された取り組みであるといえる。

6. 終わりに

唱歌劇は、児童の心情を陶冶し、情操教育の一環として行われていた。唱歌劇は、演じるという行為そのものではなく、児童が鑑賞するということに重きを置いていたため、現在指摘されている見せるための音楽劇とは違う立場をとることが明らかとなった。さらに、唱歌劇は学芸会改良として始められたことから、当時の学芸会は成績発表の場であったことも見えてきた。

学校教育における音楽劇の原点である唱歌劇は、山本壽の音楽教育観に加え、主事である佐藤の芸術教育観や学芸会に対する意向、そして教育界における風潮や社会的な背景が大きく反映された取り組みであったといえる。

注

1) 表4における太字の論述、第6巻第69号「唱歌劇について」、第8巻第92号「唱歌教授上の諸問題(完)」、第11巻第127号「唱歌劇に就いて」、第11巻第134号「再び唱歌劇に就いて」を指す。

引用・参考文献

- ・羽陰生（1919）「学芸会概況」『学校教育』第6巻第69号 広島高等師範学校教育研究会 pp.56-92
- ・白鳳生（1921）「学芸会概況」『学校教育』第8巻第94号 広島高等師範学校教育研究会 pp.58-76
- ・原田生（1922）「広島高等師範学校附属小学校第17回児童学芸大会を見る」『学校教育』第9巻第106号 広島高等師範学校教育研究会 pp.81-106
- ・H先生（1925）「児童音楽演奏会概況」『学校教育』第12巻第143号 広島高等師範学校教育研究会 pp.109-115
- ・北村恵子（2001）「幼児の劇表現活動に関する一考察」『児童文化研究所所報』第23号 上田女子短期大学 pp.57-69
- ・N生（1923）「附属小学校学芸大会第18回児童学芸大会記事」『学校教育』第10巻第116号 広島高等師範学校教育研究会 pp.85-110
- ・NH生（1920）「創立15周年記念学芸大会概況」『学校教育』第7巻第85号 広島高等師範学校教育研究会 pp.69-86
- ・佐藤熊治郎（1919）「学芸会に関する愚見」『学校教育』第6巻第69号 広島高等師範学校教育研究会 pp.44-47
- ・谷村生（1924）「第19回児童学芸大会記事」『学校教育』第11巻第127号 広島高等師範学校教育研究会 pp.71-105
- ・富田博之（1993）『演劇教育』国土社
- ・山本壽（1919）「唱歌劇について」『学校教育』第6巻第69号 pp.50-54
- ・山本壽（1920）『唱歌劇第一集—舌切雀—』目黒書店
- ・山本壽（1920）『唱歌劇第二集—かうもり・狐と虎—』目黒書店
- ・山本壽（1920）『唱歌劇第三集—花咲爺—』目黒書店
- ・山本壽（1920）『唱歌劇第四集—大蛇退治—』目黒書店
- ・山本壽（1921）「唱歌教授上の諸問題(完)」『学校教育』第8巻第92号 pp.32-38
- ・山本壽（1922）『唱歌劇第五集—一寸法師—』目黒書店
- ・山本壽（1924）「再び唱歌劇に就いて」『学校教育』第11巻第134号 pp.61-73
- ・吉富功修（1994）「大正期の唱歌劇に関する研究（3）—唱歌劇作曲時期の山本壽の論述を中心として（1）—」『広島大学教育学部紀要』第二部第43号 pp.113-122
- ・吉富功修（1995）「大正期の唱歌劇に関する研究（4）—唱歌劇作曲時期の山本壽の論述を中心として（2）—」『広島大学教育学部紀要』第二部第44号 pp.75-84

[第一次史料]

・山本壽『学校教育』広島高等師範学校教育研究会

- 第1巻（大正3年） 第7号 唱歌教授の根本的欠陥 pp.8-12
第11号 人格陶冶と唱歌教授 pp.232-236
- 第2巻（大正4年） 第13号 青島陥落 p.120
第17号 幼学年児童に対する唱歌教授の取扱及び注意 pp.48-55
第24号 唱歌の衛生及び生理的要件 pp.106-116
- 第3巻（大正5年） 第28号 略譜改造論 pp.51-55
- 第4巻（大正6年） 第39号 児童唱歌について pp.58-64
第41号 複音唱歌と単音唱歌 pp.45-49
第43号 欧州に於ける歌謡と唱歌教授の歴史的発達 pp.42-52
第47号 唱歌教材の選択及生理（一） pp.33-40
第48号 唱歌教材の選択及生理（二） pp.38-42
第50号 唱歌教材の選択及生理（三） pp.39-45
- 第5巻（大正7年） 第54号 聴唱法より視唱法まで pp.86-97
第60号 唱歌教授に関する参考書（一） pp.58-67
第61号 唱歌教授に関する参考書（二） pp.53-59
- 第6巻（大正8年） 第65号 応募当選歌詞曲譜 p.82
第69号 唱歌劇について pp.50-54
第74号 儀式唱歌について pp.46-55
第77号 1月1日の儀式唱歌について pp.37-42
- 第7巻（大正9年） 第79号 紀元節の儀式唱歌について pp.29-34
第85号 師範学校音楽科の改造 pp.8-14
第87号 学校唱歌の民衆化 pp.55-65
- 第8巻（大正10年） 第91号 唱歌教授上の諸問題（一） pp.27-34
第92号 唱歌教授上の諸問題（完） pp.32-38
第97号 師範教育第二部に於ける音楽科制度の欠陥 pp.28-31
第101号 学校唱歌改良意見 pp.100-106
- 第9巻（大正11年） 第103号 時勢に逆行する音楽教育 pp.111-115
第106号 校歌の制定に就いて pp.39-44
第107号 校歌の制定に就いて（承前） pp.11-24
第110号 子供の唱歌に就いて pp.81-87
第113号 唱歌教授五十年 pp.39-47
- 第10巻（大正12年） 第116号 唱歌教授五十年 pp.9-14
第119号 辻音楽に就いて pp.7-13
第122号 オーケストラの組織 pp.135-142
- 第11巻（大正13年） 第127号 唱歌劇に就いて pp.9-15
第131号 英米仏国々歌の由来 pp.130-137
第134号 再び唱歌劇に就いて pp.61-73
第137号 亜米利加の国歌の由来 pp.131-139
- 第12巻（大正14年） 第140号 時代の風潮と流行唄 pp.53-58
第144号 音楽の鑑賞教育と教材選択の一方法 pp.22-27
第147号 音楽の鑑賞教授に於ける一般的注意 pp.18-22
第149号 幼学年児童に対する音楽の鑑賞教育 pp.22-30
第150号 幼学年児童に対する音楽の鑑賞教育 pp.18-23
- 第13巻（大正15年） 第151号 高学年児童に対する音楽の鑑賞教育 pp.40-47

- 第 155 号 高学年児童に対する音楽の鑑賞教育 pp.43-55
第 157 号 高学年児童に対する音楽の鑑賞教育 pp.25-29
第 160 号 高学年児童に対する音楽の鑑賞教育 (承前) pp.88-96